教育懇談会の概要

【日　　時】 令和8年10月16日（金）

【訪 問 先】 米沢市すこやかセンター2階大会議室（13:25～15:00）

（教育委員の主な発言内容）

・ 各市町の取組から、学力向上に向けたさまざまな工夫と継続的な努力が進められていることがうかがえた。こうした取組の成果は短期間で数値に表れにくく、時間をかけて現れてくるものだと感じた。大人が一生懸命取り組むほど、子どもの姿が見えにくくなったり、教員が取組に時間を取られ、子どもと向き合う時間が減ったりすることがないか、留意が必要と感じた。学校は、子どもが「行くと楽しい」「友達と一緒なら苦手なことも頑張れる」などと感じられる場所であることが大切であり、子どもが学びたいと思える環境づくりが重要であると感じた。家庭学習については、授業との連動が大切であるとしつつ、宿題の質と量のバランスが必要と考える。宿題の目的が分からないまま量だけをこなすのではなく、家庭学習で取り組んだことが授業で生かされ、「分かった」「できた」という実感につながることが望ましい。また、子どもの状況に配慮しながら、学校が楽しい、学ぶことが楽しいと感じられる環境を整えることが重要と考える。（丹治委員）

・ 子どもたちが楽しく幸せに学ぶためには何が大切かと思いながら3人の子育てをしているが、幸せであることをすべて学力で測ることができないと感じている。自然豊かな山形には自然の中から探求したり考えたりする機会が都会よりも断然多いと感じる。都会のやり方を真似するのではなく、山形だからこそできることを大切にしていくことが子どもたちや先生方のウェルビーイングにつながるのではないかと感じる。各市町の取組から、地域の実情に応じた様々な工夫がなされていることが分かった。また、自然や地域文化といった特色を生かした取組も行われており、大変素晴らしいと感じた。山形で育ち学んだ子どもたちには、将来的に地域へ戻り、次の世代の学びや地域の発展を支える存在になってほしいと感じる。そのためには、子どもたちが地域や自然に愛着を持てるよう、学校の中だけでなく、

外で風や木々を感じながら学ぶ体験を積み重ねることが大切であり、そのような機会を小学校段階から数多く設けていくことが必要ではないか。先生方からは、子どもたちのために頑張らなければならないという強い責任感や熱意が感じられる一方で、疲れを抱えておられるのではないかと感じる場面もある。先生方自身がいきいきと働くことができれば、その姿に憧れを抱いた子どもたちが、将来教員を目指すきっかけにもなるのではないかと感じた。学力の向上に取り組むとともに、山形の豊かな自然環境を生かした、この地域だからこそ実現できる学びをさらに充実させてほしいと感じた。（和田委員）

・ 南陽市から示された「分かる授業」と「力がつく授業」は同じではないという考えに共感した。授業中に「分かった」と感じるだけでなく、後になっても自分で考え、教えてもらわなくてもできる状態が、学習の定着であると考える。基礎が定着してこそ、応用や発展的な学びにつながるのではないか。自身のパソコン研修等の経験からも、説明を受けてその場でできたとしても、繰り返し練習しなければ時間の経過とともに忘れてしまうと感じる。学んだことを自分のものにするためには、反復による定着が必要であり、宿題や家庭学習はその機会になり得るのではないか。宿題の形式が紙かデジタルかにかかわらず、繰り返し取り組み、内容が腑に落ちるところまで学ぶことが重要と考える。また、家庭で一人で学習することが難しい子どももいるため、家庭での見守りや地域の支援も関係すると感じた。学校だけに負担を集中させず、公民館等での活動や地域の学習支援、習熟度に応じた学びの場なども活用し、地域の力を生かして家庭での学習を支える取組を進めてほしい。（工藤委員）

・ 川西町から報告のあったカリキュラム・オーバーロードについて、各市町に共通する課題ではないか。教育内容が増えていく中で、すべてをそのまま受け入れるのではなく、地域として必要な力や重点を見定め、取組を選択・集中していくことが必要と感じた。県や市町村ごとに、どのような力を持つ人材を育てたいのかを考え、「地域としてこれを大切にする」という柱を定めることが、教育内容の過密化を防ぐうえでも大切ではないか。一方で、学力向上に向けた取組は、子どもの将来

の選択肢を広げるうえで重要であるとも感じた。小中学校段階で基礎的な学力を育むことが、その後の進路や学びの可能性につながるため、学力の課題に向き合う必要があると考える。ただし、学力向上のために現場が過度に追い詰められることは避け、各地域の特色を踏まえて、重点を定めて取り組むべきと考える。競争の激しい東北大学などの希望する進路に進むためには、小・中学校段階から学力を育成していくことが重要である。そのため、子どもや教員が学ぶことの意味を理解し、努力が将来の選択肢を広げることを意識できるようにしていく必要があると考える。（小関委員）